

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	藤井 俊之
論文題目	啓蒙と野蛮 —アドルノ美学における人間性の位置付け—		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士学位申請論文は、フランクフルト学派(批判理論)の中心人物テオドーア・W・アドルノの美学思想において「人間性(Humanität)」なるものがいかなる位置にあるのかについて論じたものである。「人間性」の概念は、ヨーロッパ18世紀の啓蒙主義と抱き合わせのかたちで出現し、市民社会の現実的進展のなかで、その内実をますます空洞化してゆく傾向にある。アドルノは、M・ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』で、本質的かつ苛烈な啓蒙批判を行なう一方、数々の音楽評論、文学批評において、「人間性」の概念がその内実を失って崩壊してゆくさまを暴き出した。本論文は、18世紀からの「人間性」概念の変遷を歴史的にたどりながら、アドルノのこうした啓蒙批判、「人間性」批判における徹底した否定性のうちに、逆に「人間性」のもつ現代におけるまっとうな可能性を求めようとする反転的な意図が隠されていることを明らかにする。</p> <p>全体は7つの章に分かれ、巻末に2つの補論が付されている。この補論は、ドイツの初期啓蒙主義を代表する知性G・E・レッシングやM・メンデルスゾーンを中心に、演劇における道徳と快楽の関係を問い、とりわけ「同情」のうちに善悪を越えた「人間性」が浮上してくる経緯について論じたものであり、論全体の展開のための補足的前提にも相当する部分である。</p> <p>第1章は、ドイツにおいて(擬)古典主義を開花させたゲーテの劇『タウリスのイフィゲーニエ』(1787年)を論じたアドルノの論考「ゲーテの『イフィゲーニエ』の擬古典主義によせて」を扱う。アドルノは、この劇が、通例言われているように文明(啓蒙)における「人間性」へのたんなる手放しの讃歌などではなく、そこには、文明(ギリシャ人)のなかに野蛮が、逆に野蛮(蛮族の王トーアス)のうちに「人間性」が隠れ込んでいる点に注意を向けた。本章はそうしたアドルノの見方にもとづいて、18世紀末のゲーテにおいて早くも啓蒙と野蛮の弁証法が文学的テーマとして現れ出ていることを確認する。</p> <p>第2章は、ゲーテと同時代のウィーン古典派ベートーベンをとり上げる。アドルノは、ベートーベンの音楽のうちに、「真理とは全体のことである」とするヘーゲルの哲学(とりわけその「媒介」操作)を見てとるだけではない。ベートーベンの音楽における「展開部の抹消」に、カント(とりわけその第三批判、美的判断)との近さを指摘することによって、そこに、全体としての「人間性」概念の破綻(「全体とは非真理のことである」)が予兆的に現れ出ているのを見てとった。「人間性」が啓蒙の暴力を越えて生き延びるために、美的なものの中に入り込んで行かざるをえなくなるというなりゆきを、ベートーベンの音楽のありようを通じて論じたのがこの章の大筋である。</p> <p>第3章は、古典派につづくロマン派における「人間性」の位置を、アドルノのJ・アイヒェンドルフ論の読解を通して推し測ることにあてられる。アドルノは、彼の詩のなかに、過去をなつかしみ礼賛するだけの保守主義とは異なったモデルネの精神が息づいているのを読みとり、そのよってきたるところを、彼の市民社会からの「疎外」とそれに対する「抵抗」のうちに見てとった。本章は、「人間性」なるものの可能性がこうした「疎外」と「抵抗」のうちにはしか見出せなくなった19世紀半ばの状況を指摘するとともに、アイヒェンドルフの「憧憬のアレゴリー」をアドルノの論に沿って読み解くことを通して、まっとうな「人間性」への希求が当時もはや、美的なものへの徹底した自律を旨とする芸術作品のなかでしか出現できなくなってしまうと結論づける。</p>			

第4章は、音楽の分野における同じくロマン派のヴァグナーについてのアドルノの見方について論じ、第三章の結論をさらに肉付けする。アドルノは、ヴァグナーには肥大化した自我（市場経済の下に増大する物象化の経験とファンタスマゴリーの乱舞）が前面に現れ出ているものの、その背後には、やはり市民社会からの「疎外」とそれに対する「抵抗」、さらには「革命の機を逸した市民のニヒリズム」が濃厚に見て取れると指摘する。本章はそこから、「人間性」なるものが、死なないし「一度として存在しなかった過去」の想起のうちで、「無からの生成」（それはベンヤミンの「復活のアレゴリー」とも言い換えられる）という形でしか把握できなくなった19世紀後半の事態をクローズアップする。

第5章と第6章は、近代における内面性（「人間性」）の崩壊という観点でアドルノに大きな影響を与えつづけたベンヤミンの思考に分け入ることによって、「人間性」についてのアドルノの見方を側面から見直すのを主眼とする。第5章では、主客の区別を欠いたベンヤミンの「イメージ」についての考え方が、内面性の崩壊という現代的事態と同時的に現れたものとして抽出される。そして、これがL・クラークスのイメージ論に源を発し、ベンヤミンの「イメージ」の 아우ラ 的「遠さ」につながっていると同時に、そのシュルレアリスム的な「近さ」となって二極分解の形で現れていることが明らかにされる。アドルノは、とりわけこの後者のイメージ論の核心を受け継ぐかたちで、近・現代における「人間性」解体の事態を鋭く見据えていた、というのが第5章の論の大筋である。つづく第6章では、これを受けてベンヤミンのシュルレアリスム論で展開された「世俗的啓示」ならびに「百パーセントのイメージ空間」なるものもつ意味が探られる。「人間性」という共通項が失われた世界にあって、集団的なものの経験をいかにして可能にすることができるかというベンヤミンの模索が、アドルノに継承されてゆく経緯が明らかにされる。

最終章は、アドルノのベケット論（「『勝負の終わり』を理解する試み」）の解説にあてられる。核戦争による市民社会の全面崩壊とともに「人間性」が完膚なきまでに瓦解してしまった事態を描くベケット劇にアドルノが何を見ようとしていたのかが論じられる。本論文は、このベケット論の最後に、ベケットの「省略」技法とパラレルのかたちでベンヤミンの「静止状態の弁証法」（反転に向かう弁証法）というキー概念が出現しているのに注目し、アドルノが、ベケット劇の不条理の極点において反転の可能性を見出そうとし、絶望のなかにまっとうな「人間性」が逆説的なかたちで浮上してくるのを感知しようとしていたという結論をもって閉じられている。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、18世紀の啓蒙主義ないし市民社会の中で生まれた「人間性 (Humanität)」概念の空洞化を問題にし、まっとうな「人間性」の奪取の可能性が美的なるもの (文学と音楽) においてしか不可能になってしまったことを、アドルノの諸論考を解説しつつ論じたものである。初期啓蒙主義のレッシング、古典派のゲーテとベートーベン、ロマン派のアイヒェンドルフとヴァグナー、そして現代の不条理演劇のベケット等々における真の「人間性」への希求のさまを歴史的に追いかけるとともに、これに、アドルノに大きな影響を与えたベンヤミンの思考を間にはさみ込みながら、アドルノ (そしてベンヤミン) の思考の路線上で、「人間性」なるものが現在いかなるかたちで実現可能かを問うたものである。『啓蒙の弁証法』ならびに『否定弁証法』で徹底した理性批判を行ったアドルノの否定的姿勢の背後に、『美の理論』で展開された啓蒙ないし「人間性」のあるべき姿をめぐる彼の繊細な眼差しが息づいていることを論証するのが本論の趣旨である。本論文の評価すべき点は、おおむね以下の5点に集約される。

1) 本論は、大きくいえば、普遍的理念 (啓蒙理性) と個別的特殊 (欲望) をいかに調停し宥和させることができるのかという近代市民社会のいわばアポリアに敢然と目を向け、アドルノの難解な思考のうちに、この解決のための方向性を読み取ろうとしている。それは本論では、啓蒙理性と「人間性」にあらたに紐帯を結び直そうとする執拗な努力となって現れている。啓蒙ならびに市民社会の進展のなかで「人間性」なるものが変質し空洞化してゆく昨今、この「人間性」をぎりぎりの地点で救い出そうとする本論の問題意識は、きわめて広くアクチュアルな意味をもったものとして評価できる。

2) 本論は、「人間性」の概念が18世紀の啓蒙主義とともに生まれ、その後それがどのように空洞化してゆき、それに対して芸術の分野でどのような見直しがなされてきたか、その事実を大きく現在にいたるまで歴史的にたどり、その格闘のさまを具体的に明らかにしている。啓蒙が崩壊してゆくという見方は、アドルノをはじめ、これまでさまざまな思想家たちによって指摘されてきたところであるが、これを啓蒙の支柱ともいえる「人間性」の概念をめぐる具体的に論じた論文は少ない。そうした意味で、本論文が、文学、音楽の分野に果敢に分け入り、この議論を具体的な芸術作品に即して展開したのは、大きな功績と言わねばならない。

3) 本論は、苛烈な啓蒙理性批判、市民社会批判によって合理性そのもの、コミュニケーション理性そのものを窒息させたとの悪評も高いアドルノの思考に、文学そして音楽の分野にまで踏み込みながら、彼の思想の真意がどこにあるのかを、真の「人間性」の希求という観点から抉り出した。難解なアドルノの思考への取り組みが、断片的にしかなされていない観のある今日、そうした大きな問題意識をかかえてこれに踏み入っている本論文は、アドルノ研究にあらたな活力を与える意味でも大いに価値があると判断できる。

4) 本論は、とりわけ第5章と第6章で詳しくなされているように、アドルノとベンヤミンの関係に目配りをきかせ、とりわけ両者の差異を気づかせてくれる。アドルノとベンヤミンは、これまでもしばしば同列に並べられ、同じ文脈のなかで論じられてきた傾向が強いが、この両者の違いに深く踏み込んで論じた論文は数少ない。本論は、ベンヤミンの「静止状態の弁証法」「アレゴリー」「アウラ」「イメージ」といった独特の概念が、アドルノにおいてどのように変容したかたちで受容されていたかを浮かび上がらせており、数多いベンヤミンの研究者にとっても意義あるものに仕

上がっている。

5) 本論文は、アドルノやベンヤミンの難解な哲学的思考を丹念に読み込んでいるだけでなく、ヨーロッパの小説、詩、劇の諸作品に深く分け入り、音楽芸術の分野にまで分け入って論じられており、その意味で細部のプロセスに目を向けた肉厚のものとなっている。思想のもつ真の内実は、骨格だけを明らかにし、分かり易い結論を取り出すだけでは尽くすことはできない。その点、本論文は、結論をさほど明晰なかたちで提示することはできていないとしても、アドルノの思考のプロセスをさまざまな視点から具体的に説明し、これまでのアドルノ研究において欠けている部分を補うことにもなっており、その点でも評価すべきだと判断できる。

以上をもって、本論文が、大きく文明論研究の観点からも、また個別的にアドルノ、ベンヤミン研究においても、すぐれた意義をもつものと判定できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分のあいだ、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成 年 月 日以降